

謝辞

VUCAの時代。子供が未来を切り拓き、社会の創り手として育っていくために必要な体験を提供したいと考え、MYOKO ネクサスキャンプを企画しました。多様な個性をもつ子供同士が関わり合いながら、自身を見つめ、自らの主体性を発揮していくための仕掛けとして、子供たちがキャンプ日程の一部を決めること、必要な道具をリヤカーに積んで自分たちで運ぶことの2つを取り入れました。長期の移動型キャンプにおいて、安全性を確保しながら、「何を、どこまで子供にゆだねるか」がカギでした。初めての試みも多く、想定外のこともありました。子供が主人公となり、班付きスタッフや運営スタッフが頭と身体を使って全力でサポートし、子供一人ひとりが輝くことができました。本報告には、明らかになった成果と課題のエッセンスが記載されています。ご覧の皆様が青少年へ体験活動を提供する際の参考になれば幸いです。

このキャンプを企画し、運営、評価をするにあたり、国立妙高青少年自然の家の運営協議会委員の皆様からは、教育事業プロジェクトの一つとして様々ご検討いただきました。委員長の筑波大学教授 坂本昭裕様からは、スーパーバイザーとしてキャンプに一部帯同していただき、子供やスタッフの姿をもとにした具体的なアドバイスをたくさん頂戴しました。他にも、本事業の実施にあたり関係機関・団体・企業の皆様から多くのご支援やご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

国立妙高青少年自然の家 所長 水澤 哲



ネクサスキャンプ 2025 運営委員会 兼 国立妙高青少年自然の家運営協議会委員

- 坂本 昭裕 氏
(筑波大学教授・MYOKO ネクサスキャンプ 2025 スーパーバイザー)
- 植木 潤 氏 (国際自然環境アウトドア専門学校副校長)
- 瀧 直也 氏 (信州大学准教授)



後援

新潟県教育委員会／妙高市教育委員会／上越市教育委員会／糸魚川市教育委員会

協力企業 (五十音順)

有限会社 アークプランニング／株式会社 伊藤園／志賀スポーツ／株式会社 スノーピーク／dancing snow／燕温泉宿 花文／株式会社 橋詰商会／有限会社 山田損保事務所

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家

ネクサスキャンプ 2025 ～仲間とともに創る、世界に一つだけのキャンプ～

発行日／令和8年2月
編集・発行者／独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家
印刷所／株式会社 桐朋

お問い合わせ／
独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家
〒949-2235 新潟県妙高市関山 6323-2
TEL 0255-82-4321 FAX 0255-82-4325
URL <https://myoko.niye.go.jp/>



ホームページ



Facebook



Instagram



YouTube



令和7年度

MYOKO NEXUS CAMP 2025 報告書

統合型長期キャンプ

仲間とともに創る、世界に一つだけのキャンプ



概要

ICT等を用いて情報を集め、参加者で宿泊場所、そこまでのルート、野外炊事の内容等について話し合い、自分たちの行動計画を、意見を出し合いながら作成し、それを基に行動していく統合型キャンプである。統合型長期キャンプとは、様々な個性や特性をもつ子供たちが、性別や障害の有無等に関係なく、自然への挑戦や他者との協働を通して、お互いを認め合い、成長し合っていくことをねらいとしている。子供同士がつながり、協働し合うチャレンジの場として、火打山・妙高山の縦走登山もプログラムに取り入れた。仲間とともに考え、合意形成を図りながら目標を達成する体験を通して、主体性を育み、これからの自分について考えていく子供たちを後押ししていく7泊8日のキャンプである。

ねらい

他者と協働しながら課題に立ち向かうことで、主体性を育む

※このキャンプでは、主体性を次の2点として捉える。

共通の目標に向かって、一人一人が考え行動する。

- ICT 機器等を活用した情報収集
- 行動計画の作成
- 計画を基にした行動

合意形成を図る中で、互いに尊重し合い仲間と協働する。

- 宿泊地、ルート、食材等の決定
- リヤカーで必要物品の運搬
- 宿泊地のルールの順守

活動内容

●期日

事前キャンプ
令和7年
7月5日(土)～6日(日)

本キャンプ
令和7年
7月27日(日)～8月3日(日)

●参加者

小学5年生～中学2年生までの6名

●帯同スタッフ

国立妙高青少年自然の家職員2名
筑波大学生スタッフ2名
妙高自然の家スタッフ2名
※スーパーバイザー兼臨床心理士1名(筑波大学教授)は事前キャンプ、本キャンプ初日と最終日のみ参加
※その他、物資運搬、緊急車両などのサポートスタッフ複数名参加

ステージ・期日	主な活動内容	活動のねらい
出合いのステージ 7月5日(土)～7月6日(日)	○開会式・全体会 ・キャンプのねらい ・本キャンプの活動内容や持ち物・装備 ・ICT機器の利用の仕方 ○テント設営・野外炊事 ○テント泊 ○スタッフとの事前面談	・初めて会ったメンバーで活動に取り組む。また、活動内容等の話を聞く中で、本キャンプへの意欲を高める。
創造のステージ 7月27日(日)～7月28日(月)	○行動計画作成(自然の家) ○野外炊事 ○テント泊	・行動計画を作成したり準備をしたりする活動を通して、メンバーの役割を知り、協働し合おうとする。
つながりのステージ 7月29日(火)～7月30日(水)	○歩き(宿泊場所から笹ヶ峰) ○野外炊事 ○テント泊	・持ち物を運んだり、自然の家とは異なる場所で活動したりすることにより、メンバーのことを考えながら協働しようとする。
挑戦のステージ 7月31日(木)～8月1日(金)	○火打山登山 ○ヒュッテ泊 ○妙高山登山	・困難な状況であっても、グループの仲間と声を掛け合い、助け合いながら活動する。
未来につなげるステージ 8月2日(土)～8月3日(日)	○後片付け ○振り返り(個人・グループ) ○ゴールパーティー企画・実施 ○閉会式	・これまでの活動を振り返り、仲間に感謝の気持ちをもつとともに、これからの自分について考える。

MYOKO ネクサスキャンプ 成果1 「カウンセラーから見た子供たちの変容」

7泊8日のキャンプの中で、仲間との関わりから自分の成長を実感した子供たち。その変容について各ステージ毎に考察を行った。

1日目
2日目

創造のステージ 行動計画作成・妙高自然の家⇒8km⇒東赤倉テニスコート

スタートは、それぞれが周りとの関わりや自分自身の役割について、プレッシャーと不安をもっていった。アイスブレイクの後、行動計画作成では、ICTを活用して、細かい情報を集めながら、笹ヶ峰キャンプ場までの3日間の計画を立てた。宿泊場所や移動距離を考慮しながら、6人がどんなキャンプにしたいか、何を大切にしたいかを、理由も含めて伝え合った。多数決で決めるのではなく、お互いの意見を聞き合い、みんなで納得できる計画を立てることを心掛けていた。自分たちで宿泊先やルートを決め、世界に1つだけのキャンプを創り上げることができる喜びを感じていた。2日目は、自分たちで決めた計画を成功させるべく、想定していたより数時間早く出発した。意気揚々と出発した6人だったが、猛暑の中、リヤカーを引きながら上り坂を歩くことは、思った以上に大変な様子であった。カウンセラーは子供たち同士のつながりや関わりを大切にするために、最小限の介入に努めた。話し合いの中で、お互いの意見を聞き合うことの大切さを実感していた。



3日目
4日目

つながりのステージ 東赤倉テニスコート⇒3km⇒東本願寺池の青少幼年センター⇒16km⇒笹ヶ峰キャンプ場

子供たちは、考え方だけでなく、体力もそれぞれ違うことに気付いた。それぞれの体力を考えながら、起床時間や活動の時間配分を考えた。心配や緊張も解け参加者同士の距離も縮まった。振り返り、リヤカーを引く上での注意点など、自分が経験したことを踏まえて、グループのために意見を出していた。考えがぶつかりあった時も、自分の考えを伝え、話し合っ解決できるようになってきた。地図を見て休憩場所やペースを決めながら、リヤカーを引いて歩いた。日々起こる様々な課題に対し、自分事として考えることが難しかった子も、自分から進んで行動するようになり、他のメンバーも、周りに村度なくアドバイスや意見を伝えることができてきた。グループになじめなかった子も、歩いている中での役割分担、野外炊事などでの話し合いを通し、それぞれが得意なところを自他共に理解し合えるようになり、適所適役ができていた。協力の大切さについて振り返る子が多かった。まさに、参加者同士がつながり始めたステージとなった。



5日目
6日目

挑戦のステージ 笹ヶ峰キャンプ場⇒高谷池ヒュッテ⇒火打山登山⇒高谷池ヒュッテ⇒妙高山登山⇒妙高自然の家

子供たちが一番の挑戦目標と掲げていた「火打山・妙高山縦走登山」。この頃には、振り返りでの自分のつらかったこと、周りの人にもっとこうしてほしいなど、自分たちで自然と伝え合えるようになっていた。疲れと体調不良から、挫折しそうになったAさんに対し、他の5名がそれぞれの思いを伝え、励ました。Aさん自身も、仲間の言葉が力になり、6人で火打山・妙高山縦走を成し遂げるという共通の目標を達成しようとして、体を奮い立たせていた。ゴール直前では、足の痛みや苦しみながら歩いている仲間に対し、近くで楽しい話をしながら励まし、6人そろって、目標を書いた旗を掲げながら、ゴールすることができた。お互いの違いを理解し合うことで、心が通じるようになったこと、周りの声掛けや関係づくりが大切だということ、挑戦には仲間の存在が大きな力となるということ、挑戦のステージから学んでいた。



7日目
8日目

未来につなげるステージ 振り返り発表準備、ゴールパーティー計画⇒ゴールパーティー⇒閉会式

6日間の活動を振り返り、自分の体験をコラージュにまとめた。写真を選びながら、黙々と作製を進めた。最終日前夜のミーティングでは、自分の成長したところ、今の思い、仲間への感謝の気持ちを、みんなの前で伝えることができた。大変な時に仲間が助けてくれたこと、テント設営や野外炊事など、どんどん早くできるようになったこと、毎食を自分たちで作ることは苦労もあったけれど、その分おいしかったことなど、自分について語り、相手の話を聞き、そこで学んだ新しいことに挑戦してみることの大切さを話す子もいた。ネクサスキャンプでの一瞬一瞬について、みんなで思いを巡らせた。お互いの言葉に胸を熱くし、涙がこみ上げる子もいた。仲間の言葉からも、これまでの自分自身を振り返り、自分と仲間の成長を感じることができ、グループへの思いをさらに強くした。参加者自身が自分の変容を実感し、新しい自分に成長していることを確信し、それを自信とすることができていた。自分一人ではできないこと、この仲間だからできたこと、仲間のおかげで気付けたこと、相手を尊重しながら繋がっていくことの大切さをこのキャンプで実感できたと思う。



MYOKO ネクサスキャンプ 成果2 社会的スキル尺度調査を用いた結果と分析

1 調査の概要

新川・冨家（2019）が作成した社会的スキル尺度の質問紙を用いて「すごくあてはまる」「あてはまる」「あてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」の4件法で回答を求めた。

本キャンプのねらいは、「主体性」の育成である。本キャンプにおける「主体的な態度」について「共通の目標に向かって一人一人が考え行動する姿」「合意形成を図る中で、互いに尊重し合い仲間と協働する姿」と捉え、社会的スキル尺度を用いて効果を測った。

2 分析結果

キャンプ前、キャンプ直後、1ヶ月後の社会的スキルの平均値を比較した結果、一元配置分散分析では有意な差は認められなかった。しかし、キャンプの効果を示す効果量 η^2 を算出したところ、関係維持(0.05)、仲間強化(0.10)、自己統制(0.04)という結果となり、中程度の効果が示された。(表2参照)特に、仲間強化において最も高い効果が確認された。

このことから、7泊8日のキャンプは、参加者の社会的スキルの獲得に肯定的な影響を及ぼしたと推察される。この成果は、子供たち自身がルートや野外炊事の計画を立て、リヤカーを用いて炊事道具やテント等の用具の運搬を行うなど、子供たちの主体性を尊重し、子供たち同士で協働し合いながらキャンプを進めていくプログラム構成が、効果量に影響を与えたと考えられる。ただし、参加者数が限られていることから、その解釈には注意が必要であり、今後も継続的にキャンプの成果を検証していくことが求められる。

表1 社会的スキル項目

関係維持スキル	共通の目標に向かって、みんなと協力することができる。
	がんばっている友達を励ましたりほめたりすることができる。
	友達同士で協力し合うことができる。
	困ったことや悩みを友達に相談することができる。
仲間強化スキル	自分の性格や趣味などを友達に話すことができる。
	誰にでも自分からあいさつをすることができる。
	少数意見であっても、自分の考えをしっかりと言うことができる。
	場面や状況を考えて、相手に伝わるように発言できる。
自己統制スキル	積極的に集団活動に参加できる。
	みんなのやる気を高める発言をすることができる。
	まわりに迷惑をかける人に注意することができる。
	グループで指示を出したり、意見をまとめたりすることができる。
仲間強化スキル	危険なことに誘われても、断ることができる。
	きまりやルールを守ることができる。
	注意されたときなどに、いやな気持ちを態度に出さない。
	グループのことを考えて行動することができる。
自己統制スキル	休憩時間中に次の活動の準備ができる。

表2 参加者の社会的スキルの変化

	キャンプ前		キャンプ直後		1ヶ月後		F	効果量(η^2)
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
関係維持スキル	17.00	2.68	17.30	3.01	17.50	2.34	0.31	0.05
仲間強化スキル	23.30	3.54	24.10	3.54	24.30	3.72	0.60	0.10
自己統制スキル	17.60	2.33	18.00	2.09	17.80	2.13	0.21	0.04

ES (η^2) : Large=1.4, Medium=0.06, Small=0.01

MYOKO ネクサスキャンプ 成果3 参与観察による個人の変容

カウンセラーが行った参与観察から、アンケート調査では測れない個人の変容についても考察を行った。

本キャンプでは、ルートや宿泊地を子供たちの話し合いで決めていった。意見を曲げない仲間もいて、子供たち同士の意見がぶつかり合うことも度々あった。そのような状況の中でBさんは、話し合いの中で自分の意見を十分にせず「自分だけで行動しているわけではないから少し大変だった」と感じていた。しかし、リヤカーを引いての移動や、野外炊事を通じて、仲間と一緒に活動する良さに気付き、「みんなというんな話ができて楽しい」「みんなが自分の意見をしっかりと聞いてくれる」と振り返るようになっていった。仲間との関わり合いの中で、仲間への信頼と安心感ができたのであろう。その後の火打山・妙高山縦走登山では、仲間の体力を考えて並び順を提案する発言が見られた。話し合いで意見を曲げない子がいても、その意見を尊重したり、時には説得したりするようになった。Bさんは、キャンプ直後のアンケートでも「自分から行動することができるようになった」「人の気持ちを考えて自分の意見を言うようになった」と振り返った。1ヶ月後のアンケートでは、「料理ができるようになるなど、新しいことに挑戦することが嫌ではなくなった」と述べている。また、保護者も「キャンプ後の学校生活で積極的に新しい役割に挑戦するようになり、がんばる力がついてきたように思う」と、Bさんの変化を実感している。

以上から、7泊8日のキャンプの中でBさんの行動が変化してきた要因には、リヤカーを引くときや登山のときに仲間から声を掛けてもらったり、野外炊事で仲間が自分の意見を取り入れてくれたりするなど、仲間と一緒に活動する良さを知ったこと、仲間が自分を受け入れてくれたことが影響していると推察される。仲間とともにチャレンジングな活動をやり遂げるだけでなく、その過程に主体的に関与し、キャンプを仲間と創り上げたことが、Bさんの主体性を引き出し、継続的な発揮につながったと考えられる。